



吟遊詩人の闘い

開始条件: レベル5のスーズシンガー

目的: 《深淵の歌》を倒す

序幕:

「君を雇いたい。ただちに《茶色の扉》亭で演奏してもらいたいのだ」この有名な酒場のオーナーが、近くの別の店にいた君の前に、テーブルを挟んで座るとそう言った。無表情でこちらを眺め続ける。このあまりに性急な申し出を断ろうとすると、彼は手を挙げてそれを制した。

「実は今宵、早い時間の出演契約をヴァームリングの歌い手と交わしたのだ」彼は続けた。「まあ、確かに異例の選択だが。しかし彼女については、いいウワサを耳にしていた。自称《深淵の歌》だそうだ」

「すべてうまくいっていた。常連客が怪しげなことを始めるまでは。みな催眠状態にあるように沈黙し、それからヴァームリングの歌の内容を実行し始めたのだ。護衛の何人かは、客の自傷行為を止めようとして、激しい抵抗に遭った。あのヴァームリングが、客の心に乗っ取り、望むことを何でもおこなわせようと操ったようなのだ」

「私は逃げ出し、街の衛兵に助けを求めた。だが、そこに入った者は、ひとりたりと出て来ることはなかった。君のような巧みな奏者の力で、かのヴァームリングの影響力を打ち消せないか、と最後の手段として頼んでいるのだ」

君はため息をつき、申し出を受け容れた。《茶色の扉》亭に向かう。オーナーを助けるためではない。気はあがった。隣の部屋へ突進する。向こう端のスヌはクソつたれだ。だがこのヴァームリングを止め、テージから飛んでくる矢の雨を、かるうじてかわしないと、すべての吟遊詩人に対する評価がだだ下た。

がりになりそうだったから。

オーナーは入口の外で、雑多なごろつきどものかいの壁にかかったカーテンの裏から、低い怒声が取り合わせを用意していた。彼らは少しばかり神経浴びせられた。「そのみじめな飲んだくれの団を質だった。何か理解できない力と直面することを、連れて、とっとと出ていきな!《深淵の歌》は、皆知っているのだろう。しかし君がリュートの調律を始とともにある。あんただって、それに呼びかけられめると、少しは落ち着いたようだった。それから演るのは時間の問題なのさ」

奏を披露するために、なかに入った。

特別ルール:

すべての盗賊の衛兵および盗賊の射手は君の間となり、他のタイプのモンスターの敵となります。彼らのレベルはシナリオレベルより2つ下であり、各ラウンド、行動順位を49として(衛兵が先に行動し、次に射手が行動します)、「移動 +0、攻撃 +0」というアクション・ボックスを実行します(君の攻撃修正カードの山を使用)。



ついに、舞台裏の控室に隠れているヴァームリングの歌い手を見つけた。彼女に心を奪われた犠牲者ふたりによって守られている。

「あんたの演奏、素晴らしかったよ、スーズシンガー。けれど、いつまでそれを続けられるかな?」ヴァームリングの異様に低い声が、こちらの心を曇らせ始める。彼女は奇妙なリュートを語るようにつまびき、音のタペストリーを編みあげる。その歌は、君を不安揺らめく大波の中へと落とし入れた。

「あんたのそのちっぽけな歌で、どれだけ長くあたしの力を抑えていられるとお思い? あんたが演奏をとちったときだって、《深淵の歌》はずっと続いている。あんたの魂も、すぐあたしのものになるのさ!」

使用する地形タイル:

B1a
11a
G2b
A1b



盗賊の衛兵



盗賊の射手



街の衛兵



街の射手



石のゴーレム



ヴァームリングのシャーマン



戸棚 (×2)



樽 (×2)



テーブル (×3)

特別ルール：

ヴァームリングのシャーマンこそが《深淵の歌》です。

終幕：

ヴァームリングが倒れ、不協和音が鳴り響いた。続いてそのリュートが床に落ちた。《深淵の歌》の強迫的な音色は断ち切れたが、その余韻はまだ宙に漂っていた。

まだ生き残っていた仲間は、笑い、安堵の吐息をついた。危機は去ったのだ。

《茶色の扉》のオーナーは感謝のあまり「ここに演奏しに来るときは、いつでも相当量の飲み物を提供しましょう」と申し出た。しかしそれに優る報酬は、《深淵の歌》の死せる手より引きはがした、血まみれのリュートだった。これは真の芸術作品だったのだ。

報酬：

アイテム 146 番〈名手のリュート〉

